

末黒野

すくろの

2月号 (通巻858号)



トルソー

松手入れ男の声の降つてくる
散りそむる木犀の香や通夜の道
橘媛 入水の海や海桐の実
灯の入らぬ島星かぶり冬に入る
まだ口を割らぬ石榴や科何ぞ
がまずみの実や胸突きの切通し
石の橋木の橋谷戸の散紅葉
トルソーの量感にあり冬落暉
寒星や欺かれてもあざむかず
ためらはず子の担ぎけり大熊手
どの星も亡き人の魂冴えざえと
冬灯 天金くすむ智恵子抄

松本三千夫

笹鳴

椿の実二つ拾へば音生まれ
大寺の聳ゆる大樹黄落期
塵わづか漂ふが見え冬に入る
猿を見て猿に見らるる寒さかな
逆光の貌見えざりき冬の鳥
いさぎ良き楠の一幹冬の雨
ユーカーリの木の高々と冬夕焼
抱けばすぐ寢息となる子笹鳴ける
紅葉散る山の引湯に手を浸し
一期一会の重ぬる色の落葉かな
鳥悼 小山直子さん落ちて枯れの深さの残りけり
寒き夜の電話の声の別れとは

黒滝志麻子

(副主宰)

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

小 諸

森 清 信 子

深秋や虚子の墨跡まのあたり
虚子庵のサルビアの朱の翳りかな
藤村の原稿の朱や秋ともし
空堀の風のわき立ち椎黄葉
木道や池塘縁どる草紅葉
落葉松に霧迫り来る峠かな
十三夜人魚のやうに縁に座し
吸ひ込まれさうな青空渡り鳥
焼きたてのバゲット抱き蔦紅葉
重さうな雲浮く湖や冬隣

秋 時 雨

安 斎 久 英

暁の雲の紫文化の日
花野ゆく幼や五指を日に翳し
出港の巨船ゆるりと秋の暮
水甕に音の弾めり秋時雨
くつきりと見えたりやがて霧の尾根
谷川の光を紡ぎ崖紅葉
秋風や雲が雲押す波の果て
剣崎の遙か房総霧深し
早稲の香を運べる峽の棚田かな
行く秋や火の見櫓に灯の潤み



刈田

田中臥石

シーバスの転舵の波や秋日和
秋風を追うてシーバス出航す
ブランドに縁なき牛や大花野
阿夫利嶺の景を変へたり稲架襖
流星の果ては漁火能登の浜
一村の軽くなりたる刈田かな
宅配ピザのバイク出払ひ文化の日
見つめぬる顔みな紅し秋夕焼
立冬やビル影及ぶ浜離宮
木枯や富士全容を吹き残し

波郷忌

石黒興平

峡紅葉仰ぐ地球のチバニアン
末枯の地や天涯の北斗星
岩牡蠣を焼きて泡噴く午餐会
牡蠣を買ふ潮滴る柳籠
冬の夜の宇宙に遊ぶ望遠鏡
冬日浴び象形文字の手紙読む
波郷忌を修す雪待月半ば
菊坂の鎧坂てふ冬すみれ
文豪の旧居覗けり龍の玉
引力を加ふ重石や冬菜漬

千曲川

森清堯

西空へ未広がりや鰯雲
虚子庵の庇紫苑のとどきさう
天守台のひともと松の色変へず
秋の声古城に唯一無二の井戸
弦音の城址の秋を深めけり
深秋や眼下くの字の千曲川
妙義嶺に残る秋の日尖りけり
豊の秋空よりも地の輝ける
一碧の湖の空鳥渡る
草の秀の震への止まず残る虫



乙 矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



寄り道

小田嶋野笛

小鳥来て五穀輪廻を全うす
行く道は寄り道ばかり草紅葉
水よりも風よりも空秋深め
楊貴妃の秋思の眉刷毛万年青咲き
灯火親しむ知恵の輪の解けぬ宵
山里の風立つ昼の落穂かな
冬晴や持病の癒ゆる予感些と

山茶花

加藤静江

伽藍より雀こぼれて秋高し
出揃へる穂に風生まる芒原
赤城嶺を指呼に里曲の柿すだれ
川となる富士の湧水ずすこ玉
山茶花や天満宮の人まばら
寒禽や旧家の庭の茶筌塚
日だまりの艫にねむりぬ鴨一羽

蔦紅葉

菅野日出子

恋を知る少女寡黙や秋の
丹沢の嶺々近付けて台風過
朝寒や海を眼下に露天風呂
作り滝借景にして菊人形
鳩除けを廻らす寺や鳥渡る
魁けて主なき家の蔦紅葉
夫眠る丘を照らしぬ十三夜

秋惜しむ

齊藤マキ子

もみぢせる山に凭るる駅舎かな
艶つやとこの世に落つる木の実かな
河原径たどるしとどの露踏みて
灯り消すだけの月見や椅子二つ
物言ふに棘多き日や山椒の実
秋雨や木馬は瞳潤ませて
実るもの散り敷けるもの秋惜しむ

萩の紅

堺昌子

小鳥くる水たひらかな手水鉢
虚子句碑の根締めのごとし萩の紅
参道の外つ国人や小鳥くる
山峡の棚田音なき秋の雨
膝に来て日差を捉ふ散紅葉
古民家や目で追ひ切れぬ雪ばんば
目じるしとなる冬桜里の道

庭の菊

吉田きみえ

溪流の落ち合ふひびき初紅葉
庭の菊活けて客待つ昼下り
夕さりの茜色なり鯛雲
岩肌や切つ先かへす秋燕
紺碧の空締め秋の鳶一羽
万の柿吊し山裾点り初む
枯蓮に風出て沼は日を散らす

虚子の山家

今村千年

ごつごつと妙義山嶺野分雲
身に入むや虚子の山家の文机
一位の実ひかりを纏ふ山家かな
虚子思ひ愛子偲びぬ秋没日
藤村の川も古城も暮秋かな
宵闇や家路の妻とすれちがふ
親も子も片手にスマホ文化の日

雪迎へ 岡田史女

盆景の小菊かがやく日和かな
鴟高音繕ひ物の背より
ふる里へ単線走る雪迎へ
寺の裏山へ続きぬ冬桜
乾びたる松皮の屋根や石路の花
再検の夫へつきゆく小六月
木枯一号官庁街を吹き抜けて

千曲川 岡野里子

鳥渡る夕日離さぬ千曲川
夕さりの紅葉明かりや千曲川
秋没日千曲の慕情いや増せる
秋惜しむ吾も遊子や懐古園
懐古園力車に秋を惜しみけり
虚子庵の惚け紫苑や秋の風
ザルビアの燃ゆる静けさ虚子旧居



青炎集

松本三千夫選

追伸の文言多し残る虫

横浜 芝田幸恵

身心に雨音沁みて火の恋し

新蕎麦や年寄多き試食会

月皓皓気骨残して老いにけり

思はざる米寿たまはり後の月

アルバムに遺すひと世や霜の花

横浜 山崎稔子

初恋てふ藤村の詩や林檎の香

山々は晩秋の色峠道

雲かかる浅間の嶺や秋惜しむ

すずめの宿壺にあふるる秋の草

工房の白地の達磨冬隣

さらさらと桂打つ雨秋深し

横浜 橋場美篤

譜ずる虚子の虫の句秋ともし

ふくよかなる白衣観音風さやか

海よりの風透きとほり海桐の実

島渡船曲がる岬の薄紅葉

石橋の一枚岩や石路の花

築山の青き名石冬の蝶

横浜 加瀬伸子

人混みに他国の言葉酉の市

切り絵めく初更の空の十三夜

人力の車夫の名しるし冬紅葉

白鳩の四五羽のあそぶ神迎へ

茶の花やかくも静かに茶祖の寺

雲間より天使の梯子冬の海

横浜 山咲和雄

遠流の島去りゆく我や秋の雨

名月を一時隠し雲流る

豆柿の見向きもされず鈴生りに

榎櫃の実レシビをそへて道の駅

見上ぐる空止まぬ雨なし鷓猛る

鳥渡る遠流の島を高々と

横浜 太田良一

どんぐりに追ひこされけり男坂
鶏頭の畦をはみだす子規忌かな
ふるさとの香りを飲めり新走り
虚子庵の愛用茶釜火の恋し
捨て畑に日の出の勢ふ冬来る
結界を霜の隠せる寺領かな

横浜 新倉ゆき江

世界遺産の切手で巡る夜長かな

天空の研ぎ澄まされぬ十三夜
二親より貰ふ寿命や柿落葉
我が五指のごとき熊手を買いにけり
引越しの母子挨拶に来る小春
浅漬のビニールの中発酵す

横浜 今野明子

秋深み暦二枚の重さかな

吊橋の大揺れ小揺れ紅葉揺れ
黒き枝の額縁となる紅葉かな
すがりつく一枚明き紅葉かな
柔らかに紅葉散りくる石の庭
紅葉狩我が胸中の染まるごと

横浜 加藤榮一

石置きて庭際立ちぬ実南天
ひとときを邯鄲の夢ちちる鳴く
しじまなる谷戸の天心後の月
ゆつたりと雲の行くへや暮の秋
ポケットの小銭の音や冬を待つ
釈迦牟尼のかんばせの笑み今朝の冬

横浜 及川照子

かくれんぼしたし夕日の芒原
あみだ籤のやうに蔓引く烏瓜

かさこそと風とささめく落葉かな
七輪に炭団を熾す女将かな
具の多きけんちん汁の匂ひかな
酒蔵の麴の匂ふ小春かな

東大和 谷口律子

御仏の半眼に映ゆ照紅葉
紅葉揺れ水琴窟の音震へ

紅葉映す冥き池面に後退る
国宝の小さき金印初時雨
老越の石の響きや冬日和
寒月の降る竹林や人の声

耕 土 集

黒滝志麻子選



稲刈の空の青さににぎり飯

横浜 飯田マサ江

水際の亀消え空に鱗雲

横浜 加藤直人

賑はひの花咲く園の秋色に

町川の鷺の憩ふや秋夕焼

携帯に踊る指先虫の秋

チエロ聞くやくつろぐ午後の秋日和

海一望丹沢尾根に荊の実
裸木の樹冠に黒き鳥一羽
枯すすき数集まりて絶景に
膨らみて土鍋はみ出すおでん種

誰それに似たる羅漢や小六月

横浜 峰 幸子

文化の日老舗の時計ボンボンと

七五三祖父母と父母の連れ立ちて

寺町の灯点し頃や一葉忌

初霜や注連の張らるる地鎮祭

本堂の花器にぶらりと烏瓜
焼银杏弾けて玉の薄みどり
行く秋や間を計りつつ玉露つぐ
ポストまで手紙を急ぐ片時雨
枯葉落つイブ・モンタンの歌のごと

亡き夫と約束の旅京の秋

横浜 加藤タミ

コスモスの風を揺らして風になる

保津川の速き流れや溪紅葉

秋薔薇老の心よりどころ

気短の夫は何処へ日短

コスモスや風に崩るる色模様
秋遍路逸れて訪ぬる祖谷の溪
文閉ぢて耳傾ける秋の声
手練り食む蕎麦の美味さや温め酒
銭湯の長湯楽しむ冬の暮

横浜 宮崎他異雅

枯れ蓮

小川 玉泉

(名誉顧問)

リズムよく釘打つ大工菊日和
幼児にまじり団栗拾ひけり
ほかほかや子の手作りの栗おこわ
風来ては沼の枯れ蓮賑にぎし
しやしやしきと大根なます齒に染むる
盆たち冬日の庭に睦みをり

雑記帳 7

江ノ島電鉄の藤沢から二つ目の柳小路駅を降りて、西へ真っ直ぐゆくと、鵜沼女子高校がある。校舎の西側に百坪ほどの昔を残す蓮池があり木道もある。来年を期待したい。